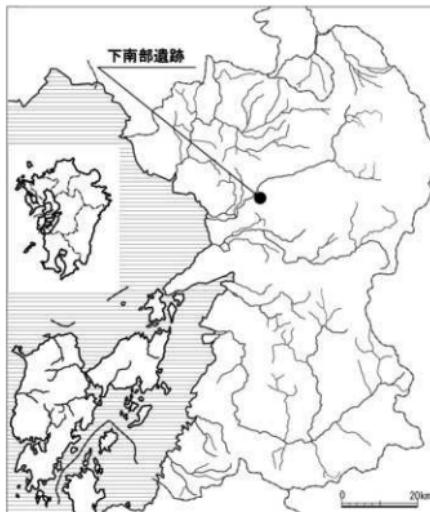


# 下南部遺跡

— 熊本県熊本市所在の埋蔵文化財 —



熊本県教育委員会

2017.3



## 序 文

熊本県教育委員会では白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い、下南部遺跡の発掘調査を実施しました。その結果、弥生時代中期の遺物包含層や古代の住居などを確認することができました。

出土遺物は擦石・敲き石など狩猟・採集など生業活動の一端を示すものとして理解され、彩色土器からは日常生活における精神文化を知ることができました。また、生活域と水辺を繋ぐ道路状遺構は水の供給や川漁など当時の生活の様子が想定される重要な遺構となりました。

本調査は熊本広域大水害に起因する復興事業に伴うものです。水は私たちの生活に恩恵と脅威という両面を持ちます。今回の調査成果をもとに、改めて自然を考える機会にもなりましょう。また遺跡の内容を広く発信することで白川流域の歴史の解明の一助としたいと思います。

本報告が地域の発展とともに、貴重な歴史の情報として引き継がれ、生かされていくことを望んでおります。なお、本調査を実施するにあたり、ご理解とご協力をいただいた地元の皆様並びに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成29年3月31日

熊本県教育長 宮尾千加子

## 例　　言

- 1 本書は、熊本県熊本市東区に所在する下南部遺跡調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、熊本県災害対策班及び熊本県土木部の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、同事業部が負担した。
- 3 遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。
- 4 遺跡の発掘調査は平成27年度に実施し、株式会社有明測量開発社の委託事業とした。整理報告作業を平成28年度まで実施した。
- 5 本書で用いる地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図をもとに作成した。また今回、地元地権者の方々に御協力を頂き実施した。
- 6 現地での遺構実測・写真撮影は委託業者が実施した。遺物の実測・製図は、春川香子・濱崎清子・立石美代子・山下義満が主に実施し、遺物洗浄・接合・復元は、文化財資料室で行った。
- 7 遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・野下智美が行った。
- 8 整理後の資料は熊本県文化財資料室で保管されている。
- 9 本書の執筆は山下が行い、編集は春川の援助を得て山下が担当した。

## 凡　　例

- 1 方位／座標／標高 国土座標第II系を基準とし、方位もそれに準じた。標高は東京湾平均海水面 (Tokyo Peil [T.P.]) による。
- 2 遺構名略号 遺構は、住居・道路状遺構・柱列・溝・粘土集中部・土坑・畝と区別し、掲載順にS001から遺構名を付け、調査時の遺構名を( )で示した。巻末に一覧表を載せた。
- 3 遺構図版 縮尺／線種 縮尺はキャプション及びスケールで図示した。遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。
- 4 遺構図版 断面ポイント 各遺構の平面及び断面図では—ラインの内側をポイントとしている。
- 5 遺物図版 縮尺 土器は1/3、石器は1/5・1/4・1/3・2/3で掲載し、図中に縮尺を示した。
- 6 遺物図版 外形線、中心線及び区画線は実線、棱線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶした。接合痕跡は、断面の内側に細線を入れている。赤彩、石器の使用痕については、以下の通りである。  
  
赤彩、磨痕、敲打痕  
土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。
- 7 遺物観察表 すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。
- 8 色調 本書で用いた土壤・胎土色調名は、農林水産省技術事務局監修「新版 標準土色帖」を用いた。青磁片については、大日本インキ化学工業株式会社発行「中国の伝統色」第2版(1986)を用いた。

## 本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査及び整理の組織	1
第3節 調査と整理の経過	2
第2章 託麻弓削遺跡群の位置と環境	2
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	4
第2節 基本土層	4
第3節 調査成果	4
第4章 総括	
第1節 遺構	30
第2節 遺物	30
第3節 結言	31
出土遺物観察表	32
遺構一覧表	
写真図版	
報告書抄録	

## 図版目次

第1図	白川関連遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25000)	6	第14図	S006・007 実測図及び 出土遺物実測図	18
第2図	調査区	8	第15図	S008・009・010 実測図及び 出土遺物実測図	19
第3図	基本土層図及び土層注記例	9	第16図	S012・013・014・015 実測図及び 出土遺物実測図	20
第4図	a-a' 西側及びb-b' 中央土層ペルト断面図	9	第17図	S016 実測図	21
第5図	遺構配置図	10	第18図	S016 実掘状況及び東側土層断面図	22
第6図	S001 硬化面検出状況・遺物出土状況 及び出土遺物実測図	11	第19図	近現代歴断面図	23
第7図	S001 実掘面実測図及び出土遺物実測図	12	第20図	出土遺物実測図 1	24
第8図	S002 実測図・遺物・粘土出土状況及び 出土遺物実測図	13	第21図	出土遺物実測図 2	25
第9図	S002 実掘状況及び出土遺物実測図	14	第22図	出土遺物実測図 3	26
第10図	S003-1 実測図	15	第23図	出土遺物実測図 4	27
第11図	S003-2 実測図	15	第24図	出土遺物実測図 5	28
第12図	S004 実測図	16	第25図	出土遺物実測図 6	29
第13図	S005 実測図	17			

## 表 目 次

第1表	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 (1)	6
第2表	白川関連遺跡周辺遺跡一覧 (2)	7
第3表	出土遺物観表	32

## 写真図版目次

図版 1	調査区東側完掘状況 西→	37	図版 6	出土遺物 (11・12・16～21)	42
	調査区西側完掘状況 西→		図版 7	出土遺物 (22～29)	43
	S001 堀方完掘状況 南→		図版 8	出土遺物 (30～37)	44
図版 2	S002 完掘状況 南→	38	図版 9	出土遺物 (38～45)	45
	S004 完掘状況 西→		図版 10	出土遺物 (46～53)	46
	S053・S054 土層断面 南→		図版 11	出土遺物 (54～61)	47
図版 3	S003-1・-2 硬化面検出・遺物出土状況 南→	39	図版 12	出土遺物 (62～65・67～69)	48
	S005 完掘状況 北→		図版 13	出土遺物 (70～73)	49
	S015 完掘状況 南→		図版 14	出土遺物 (66・74～80)	50
図版 4	S010 完掘状況 西→	40	図版 15	出土遺物 (81～87)	51
	S016 完掘状況 北西→		図版 16	出土遺物 (88～91・99～101)	52
図版 5	出土遺物 (1～7・10)	41	図版 17	出土遺物 (8・9・13～15・92～98)	53

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

調査の原因は平成24年7月12日に発生した熊本広域大水害の復興事業によるものであり、詳細な経緯は、「新南部遺跡群（10次・11次）吉原遺跡－白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一」（熊本県文化財調査報告第320集）を参照されたい。

今回報告する下南部遺跡については、平成26年8月27日・平成27年3月4日・10月20日の試掘・確認調査を皮切りに計3回の試掘・確認調査を実施している。その結果、今回の調査区内において、弥生時代、古代の遺構と遺物の存在を確認した。この調査結果について平成27年11月2日付け教文第1521号で熊本土木事務所に通知した。

その後、平成27年10月15日付け央土災対51号の熊本県知事名で文化財保護法94条第1項の通知が熊本市教育委員会に提出され、平成27年10月16日付け文振発001134号で熊本市教育長から熊本県教育長あて進達された。工事内容と試掘確認調査の結果を照らし合わせた結果、発掘調査が必要と判断した。「発掘調査」の指示を教文第1555号で熊本市教育長、熊本県知事あて通知した。

### 第2節 調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

#### 1 発掘調査の組織（平成27年度）

調査責任者 手島伸介（文化課長）

村崎孝宏（課長補佐）

調査総括 岡本真也（主幹兼文化財調査第2係長）

調査事務局 廣石啓哉（主幹兼総務文化係長）有馬綾子（参事）天草英子（主任主事）

調査担当 山下義満（参事）

調査受託業者 株式会社 有明測量開発社（民間調査委託）

#### 2 整理の組織（平成28年度）

整理責任者 平井貴（文化課長）

村崎孝宏（課長補佐）

整理総括 岡本真也（主幹兼文化財調査第2係長）

整理事務局 左岸守（主幹兼総務文化係長）・稻本尚子（参事）・竹馬牧子（主事）

整理担当 山下義満（参事）・春川香子（臨時整理補助員）

整理作業員

井上直蔵、石田敦子、伊藤智治、内田孝子、内村尚美、近藤広子、白木はる乃、田中洋子、瀧淵俊子、西田法子、瀬崎清子、原口美和子、福島典子、松本直枝、吉岡直子、上野栄子、松原泰子、河津洋介、重永照代、松本加代子、橋本由美子、木村ゆり子、勘米良浩喜、渡邊巧、笠置英一、内山香織、中尾規子、笹原英子、立石美代子、前田憲一郎

### 第3節 調査と整理の経過

#### 1 調査の経過

平成27年11月から実施し、東側の仮A区（第2図）の表土剥ぎの完了地区から調査に着手した。調査区の東から西に向かい表土剥ぎが並行したため、表土剥ぎの完了に沿い、仮A・B・C区が発生した。後に標準的グリットを設定した。

調査は平成27年11月10日から平成28年2月3日までの約3カ月であった。

以下は調査日誌から抜粋する。

平成27年11月9日 安全大会（以下この安全大会は月に一度行う） 現場作業員説明会

11月10日 作業開始 A区表土剥ぎ終了 12日B区表土剥ぎ開始（30日まで）

12月1日 東側（A区）遺構検出 C区表土剥ぎ開始（14日まで）B区遺構検出 24日 第1回高所作業車による俯瞰撮影 東側（A区）遺構実測 C区表土剥ぎ終了

平成28年1月14日 第2回高所作業車による俯瞰撮影 西側遺構検出 以後 調査区全体遺構検出 この時期は雪や雨のため作業中止（25日）など天候に苦られた。

2月1日 第3回高所作業車による俯瞰撮影 撤収開始 3日調査終了 4日検査（土木部）後 調査区引き渡し。

前述したように天候に左右され思うような進捗は厳しく、また調査区には後世の産廃が存在しこれを取り除いての調査でもあり、環境整備等でも時間を要した。本遺跡は白川河川に沿う遺跡で、また調査は民間調査委託を行ったため委託調査員との協議を幾度も重ね、調査における遺構判断や進捗の指示などは県監督者が行う形式であった。調査は東西に細長く、本体工事に伴い南側は1割・北側は2割勾配の傾斜の中での調査であった。傾斜に従い掘り進めいくため自然と調査地は狭小になり、また近年の廃棄場も見られたため調査終盤は例えると、擂鉢の見込みに位置しているような感覚を覚えた。

#### 2 整理の経過

整理は、託麻弓削遺跡群及び新南部遺跡を一括して行っている。

平成28年4月11日より整理作業を開始した。1次整理は、まず遺物の洗浄から注記までをセットとして、遺物量が少ないため一次整理はさほど時間を要さず、次に遺物の接合及び石膏入れを行ったが完形遺物はなくこの作業も速やかに終了した。一方2次整理作業は、図面の検討から行い、製図作業に移っていった。また製図作業と並行して遺物の実測図を作成し、これらの作業が終了後、遺物写真撮影を行った。

### 第2章 記載弓削遺跡群の位置と環境

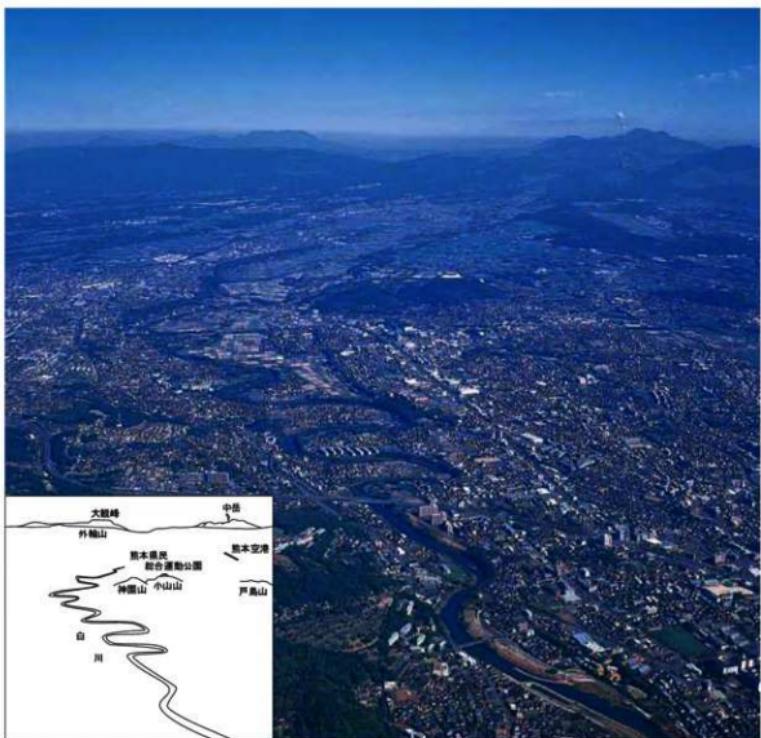
遺跡の所在する熊本市東部の白川流域の地理的環境、歴史的環境については、「新南部遺跡群（10次・11次）吉原遺跡－白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」（熊本県文化財調査報告第320集）10頁～12頁に記載されているので、ここでは下南部遺跡の立地を中心として記述する。

下南部遺跡は熊本市の東部に位置し、その所在地は熊本市東区下南部に所在する。一級河川の白川に沿う遺跡でこの河川流域には弥生期から古代にかけての遺跡が多く点在する。この白川は阿蘇カルデラを源流とし、西南西にむかって貫流し、大きく蛇行を繰り返しながら有明海に注ぐ。その流れの中途箇所に下南部遺跡が存在する。白川を挟み北側には立田山を含む丘陵地帯が東西に延び黒石原台地の一端を成している。南には託麻三山と称される小丘陵を含む託麻台地がほぼ東西に広がりを見せている。遺跡は南の託

麻台地との比高差約32mを測り、白川が北に大きく蛇行して作る突出部の標高38.9～28.6mの丘陵低地に占有する。

本調査では安全勾配を確保しなければならないため、調査箇所によっては非常に狭小となり調査は困難を極めた。また遺物は摩耗土器も多くいずれも原位置を保っていないものが多く見受けられた。

遺跡の周囲は白川上流には新南部遺跡群(43-201-726)・下流には牧鶴遺跡群(43-201-392)・対岸には竜田陳内遺跡群(43-201-394)が存在し、この地域は旧石器から連綿と遺跡が存在する。これは当時の白川の存在は不明であるが、川を中心とした生活の根柢が存在したことを物語る。



## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

#### (1) 調査の方法

単独の調査区のため調査区には特に区の設定は行わず、調査当初に表土剥ぎと並行したため仮調査区（A・B・C区）を設定（第2図）した。表土剥ぎは重機により実施した。調査区全域の表土剥ぎが完了すると標準的グリッドを設定した。これは一辺5mの正方形のグリッドを平面直角座標系に合わせ、各グリッドの中心からみて北東側のX軸、Y軸の交点の数値をX座標の百の位と十の位、続いてY座標の百の位と十の位を並べて表示し、そのグリッドの名称としている。次いで人力による遺構確認のための清掃作業、遺構検出、遺構掘削という手順で調査を進めた。その間に随時、土層断面図・遺構配置図・遺構実測図の作成や写真撮影を行った。

#### (2) 整理の方法

調査時は遺構にS番をつけた番号で表示し、これを番号順で設定したが現場判断でも苦慮した遺構は整理時に再検討後、整理担当者が判断し遺構でないものは削除した。本報告書ではすべてS番で表記したが、住居状遺構・道路状遺構・柱列・溝・土坑・他不明遺構等に大別しこの内容で掲載した。また近現代遺構は参考とした。ピットについてはすべてS番をつけたが塙立建物や柱列以外の並ばないものについては除外し遺構配置図（第5図）にのみ掲載している。

遺物については遺構出土の遺物を優先して選出し、遺構図とともに掲載した。一方包含層等出土の遺物は時代・その性格ごとに配列した。

### 第2節 基本土層

本遺跡は白川に近接し、平成24年7月に発生した大水害の砂の堆積が存在しているが周囲の聞き取りでは昭和28年6月26日の大水害はこの平成24年よりも氾濫したという。このことからこの地域は氾濫を繰り返し堆積した土層で一様でなく数メートル離れるとその様相は変化している。したがって基本土層の明確化が困難であったが、予備調査時のトレンチ土層を参考にほぼ全域に共通する土層模式図を作成した。これをもって基本土層（第3図）とした。

I層 耕作土 現在の耕作土による

II層 黒褐色土 細分層が可能で砂質の強弱が見られる。

III層 明黄褐色細砂 本遺跡検出層で砂質である。

IV層 黒褐色土 明黄褐色のブロックも混じる。縄文期の層であろうが本調査ではその遺構・遺物の出土は見られなかった。

V層 明黄褐色細砂 黒褐色土のブロックも混じる。無遺物層である。

また遺跡に3本の土層図（第4・18図）を設定した。これも本遺跡土層の参考とされたい。

### 第3節 調査成果

#### 遺構

##### S001 (S082 第6・7図)

調査区西側にあたる9975・0075グリッドにおいて検出した古代の竪穴建物である。北側は調査区外に広がるため全体は不明であるが、東西方向約4.7m、南北方向約4.1mを検出した。検出面からの深さは最

深部で10cm弱であり南西部は残りが悪く、壁面は残存しない。当初、平面から見える埋土の差異から2基の遺構の可能性を考え、トレンチを掘削した結果1基の竪穴と結論づけた。埋土は3層に分層され、埋土①層は黒褐色土主体でにぶい黄褐色細砂が多量混じる。埋土②層は竪穴の周縁部に堆積する黒褐色土で明黄褐色細砂ブロックが多量混じる。埋土③層は西側のみに堆積し、明黄褐色細砂を主体とする。

硬化面は床面全体には広がらず、島状に3か所に分かれ。また、硬化面は高く盛り上がり、周縁部との比高差は5cm程度である。また貼床は西側が浅く、東側が深く最深部の深さは約20cmである。貼床埋土は3層に分層される(第7図)。硬化面は黄褐色粗砂を主体とし、硬化面以外の部分と土質に明瞭に差異が認められた。主柱穴は北西、南西、南東の3ヵ所を確認した。北東部の主柱穴は調査区外に広がると考えられる。床面より主柱穴以外に6基のピットを検出したがS001より新しいことが確認されたため本報告では割愛した。

遺物は土師器の小破片と大小の礫が出土し、17点の出土状況があったが実測に耐えられる遺物のみを掲載した。No.6は彩色を施してある。この土師器碗の特徴からこの遺構は8世紀後半と考えられる。

### S002 (S083 第8・9図)

調査区西側にあたる0074グリッドにおいて検出した古代の竪穴住居である。S015と重複しこれより新しい。遺構は調査区外に入り込むため全体は不確定であり、したがって遺構の南東部、東西方向約2.6m、南北方向約1.6mを検出。検出面からの深さは最深部で約20cmを確認するにとどまり、推定で遺構は北側及び東側は調査区外に広がる。当初、S015と同一遺構と考えたが、トレンチ掘削とNo.6基準杭の除去により別遺構であることを確認した。硬化面は斑状に広がり、南西の端部では不明瞭で硬化面はあまり盛り上がりせず、周縁部との比高差は2cm程度である。床面からピットを1基検出した。当初、S002に伴う主柱穴と考えたが、S002と比べてしまがやや弱い。焼土・炭化物の混入が少ないと加え、竪穴の端部に近いことからS002と異なる遺構とした。

埋土は5層に分層され、埋土①層は黒褐色土主体である。埋土②層はにぶい橙色粘土でこれは竈から流出したと考えられる。埋土③層は黒褐色土主体であるが、にぶい黄橙色粘土が多量混じる。埋土④層は東側のみに堆積する。黒褐色土主体で焼土・炭化物が多量混じる。埋土⑤層は黒褐色土主体で上部ににぶい黄橙色粘土が混じる。貼床は壁面の立ち上がりが緩やかで、底面はおおむね平坦である。最深部の深さは約20cmである。貼床埋土は2層に分層される。硬化面は黒褐色土が主体であるが、明黄褐色細砂ブロックが半分近い割合を占める。硬化面より下位は黒褐色土が主体である。

遺物は土師器の小破片と拳大～人頭大の礫が出土し、埋土の上位から中位にかけて竈から流出したとみられる粘土が広がっていた。遺物の礫はいずれも扁平な円錐である。土師器はいずれも小破片であるが、坪(No.12)から時期は8世紀後半と考えられる。

### S003-1・-2 (S100 第10・11図)

調査区西側にあたる0072・0172グリッドにおいて検出した。後世の擾乱等と重複していたが、東西方向約3.2m、南北方向約4.8mを検出し、遺構は北・南共に調査区外へ広がりが想定できる。

遺構検出時はその性格が不明であり掘削を開始したが、掘削中に南北両面にて硬化面を検出した為、硬化面検出時の標高まで掘り下げた。この南側から北側への高低差10～20cm程が認められた。この硬化面の軸がほぼ同じ為、全ては一連の硬化面で川に向かう道路状遺構ではないかと考える。遺物は土師器口縁部が下層より出土したが、この遺構がその役割を終えた時期と想定している。



第1図 白川関連遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25000)

熊本県(43)熊本市(201)

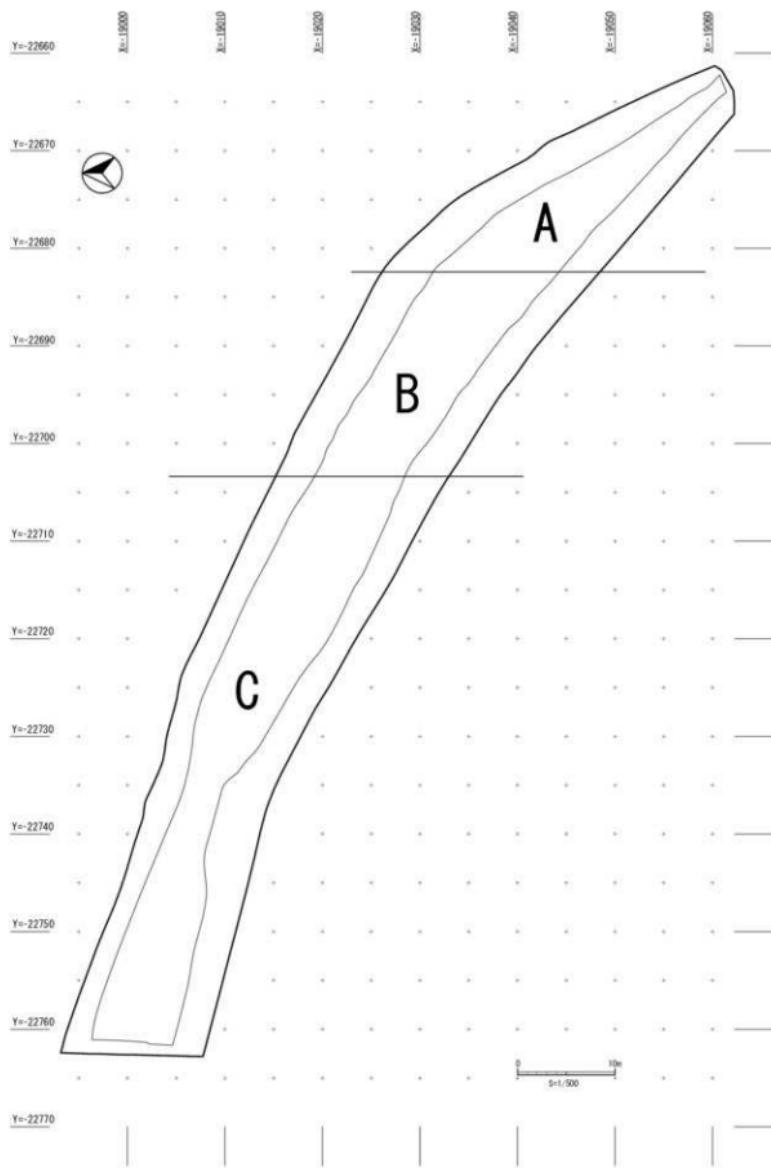
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
276	弓削平ノ下A	龍田町弓削平の下	縄文～中世	包蔵地			
377	弓削平ノ下B	龍田町弓削平の下	縄文～中世	包蔵地			
378	片原瀬	龍田町弓削平片原瀬	縄文	包蔵地			
380	柏木	清水町柏木	縄文～弥生	包蔵地			縄文草・前・後・焼 變相群
381	堂ノ前遺跡群	清水町柏木・堂の前	旧石器～中世	包蔵地		堂の前遺跡・一丁目遺跡	
382	毛町鶴	清水町柏木・町鶴	縄文～中世	包蔵地			
383	庵ノ前	清水町庵谷・上龍田	旧石器・弥生	包蔵地			早期住居跡2基・寶相基 群・熊報書あり
384	岩倉山中腹	清水町庵谷	縄文～中世	包蔵地			
385	岩倉山山頂	清水町庵谷	縄文～中世	包蔵地			
386	岩倉山	清水町庵谷	旧石器～中世	包蔵地			
387	吉ノ平	龍田町上立田	縄文～中世	包蔵地			
388	竹ノ後・芭蕉遺跡群	龍田町上立田竹の後	縄文～平安	包蔵地		竹ノ後遺跡・竹ノ後堀柵群・芭蕉遺跡	竹の後縄文後土器 合口壺群・土偶
389	追ノ上遺跡群	龍田町降内など	縄文～平安	包蔵地		追ノ上堀柵群・緑が丘遺跡・綠ヶ山ノ神遺跡 ・前屋根塗跡・長蓮寺墓跡	追の前塗跡は平安期か?
390	堂前畠	龍田町	縄文～平安	包蔵地			

第1表 白川関連遺跡周辺遺跡一覧(1)

## 熊本県（43）熊本市（201）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時 代	種別	指定	旧遺跡名	備 考
391	三の宮（牧鶴宮塚）	龍田町上立田	縄文	包蔵地			
392	牧鶴遺跡群	龍田町上立田	古墳	包蔵地		牧鶴古墳・西牧鶴箱式石棺群・中牧鶴箱式石棺群	
393	陣内上ノ面遺跡群	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵地		上ノ面A・B遺跡・庵田陣内面跡	御手洗A式・神型文 須秩式壹棺、方形圓溝墓
394	庵田陣内遺跡群	龍田町陣内	旧石器～中世	包蔵地		庵田陣内遺跡・陣内宮の前遺跡	曾根式土器、熊報古あり
395	天祥山	清水町楠木	旧石器～弥生	包蔵地			石棺、須秩式壹棺群
396	万石茶山	清水町万石	縄文・弥生	包蔵地			夜日式土器
397	桜野	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地			
398	九女グランド	黒星町		包蔵地			
399	女瀬平横穴群	庵田町陣内女瀬平	古墳	古墳		長善寺横穴群を含む	
400	庵田口	龍田町女瀬、黒星7丁目	縄文～平安	包蔵地			
401	万石昭和町地蔵	清水町万石	縄文～中世	包蔵地			
402	清水町谷口遺跡群	清水町万石	旧石器～平安	包蔵地		万石遺跡	熊調査あり
403	万石乗越	清水町万石	縄文～古代	包蔵地			
404	万石茶山古墳群	清水町万石	古墳	古墳			横穴式石室
405	立曲山山頂	黒星町	古墳～平安	包蔵地			
588	立曲山東中腹	黒星町	古代・中世	包蔵地			
589	宇留毛浦市霧島基	黒星町7丁目	縄文～平安	墓地			
590	浦山第2横穴群	黒星7丁目浦山	古墳	古墳	備		
591	浦山横穴群	黒星7丁目浦山	古墳	古墳	備		IB基
592	黒星町下立田遺跡群	黒星町	古墳～江戸	包蔵地		白石古墳・白石遺跡・立田南中遺跡・城床古墳群・井原繩跡	
593	熊本藩主細川家墓所（泰勝寺跡）	黒星4丁目	江戸	寺社	国	泰勝寺墓地古塔跡群・六地蔵	細川家墓廟は国指定の史跡、寺跡を含む庭園は県指定
605	長善寺古墳	黒星町7丁目	古墳	古墳			円墳横穴式石室
606	宇留毛小吉横櫛横穴群	黒星町7丁目	古墳	古墳			
607	つつじヶ丘横穴群	黒星町7丁目	古墳	古墳	備		
608	宇留毛神社周辺遺跡群	黒星町6-8丁目	古墳・中世	包蔵地		宇留毛神社境内古墳群・立田山南古墳（上・下）・宇留毛浦山天葬墓・立田山城跡	立田山南古墳江戸境2基 横穴式石室
685	上南部	上南部町村下	縄文	包蔵地			縄文前期・後期・遅羽・後弛 期葉落発掘調査、市報告書あり
707	玉田	上南部町玉田	縄文～平安	包蔵地			黒星式台口復原
708	平ノ山	上南部町		包蔵地			
709	下南部	下南部町下山	縄文～古墳	包蔵地			須秩式壹棺
710	北大道	御領町		包蔵地			
711	南北道	御領町	縄文～平安	包蔵地			
724	八反田居屋敷	長樋町		包蔵地			
725	松の原			包蔵地			
726	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平安	包蔵地		新南部A～D遺跡・北久根山遺跡・西谷遺跡・小間原遺跡・小間小山松雲寺遺跡・新南部三石遺跡	南北バイパス調査、市マンショングリーン調査、田辺昭三調査などあり
728	乾原・辻八反田	長樋町乾原・辻八反田	縄文～平安	包蔵地		乾原遺跡・八反田遺跡・田の辻遺跡	乾原調査後発見中心、辻八反田岡翠華探査中心

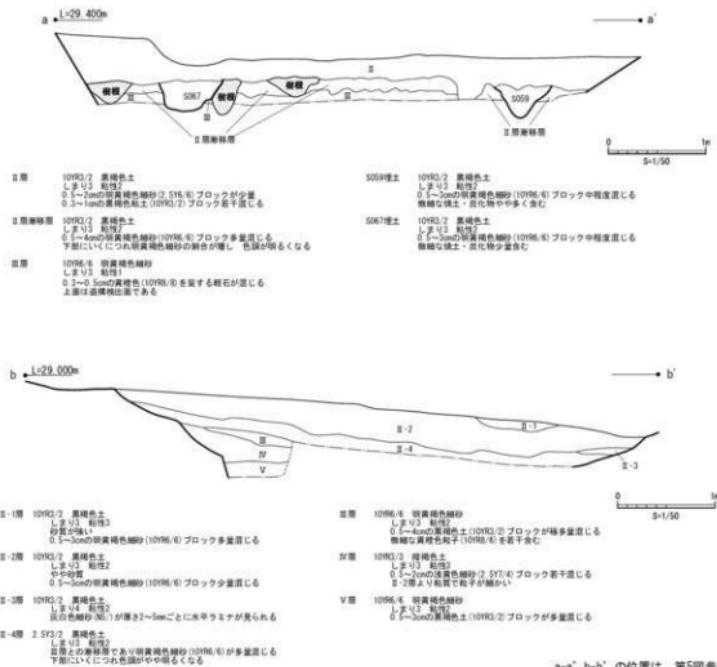
第 2 表 白川関連遺跡周辺遺跡一覧（2）

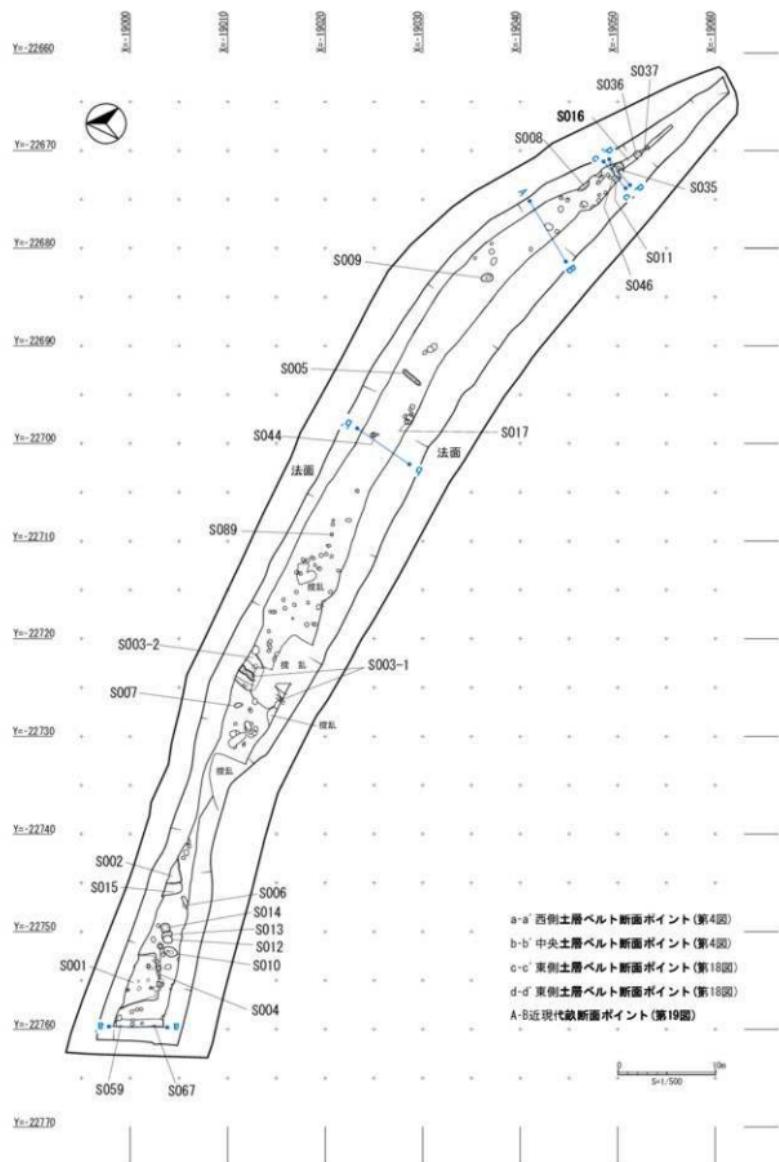


第2図 調査区

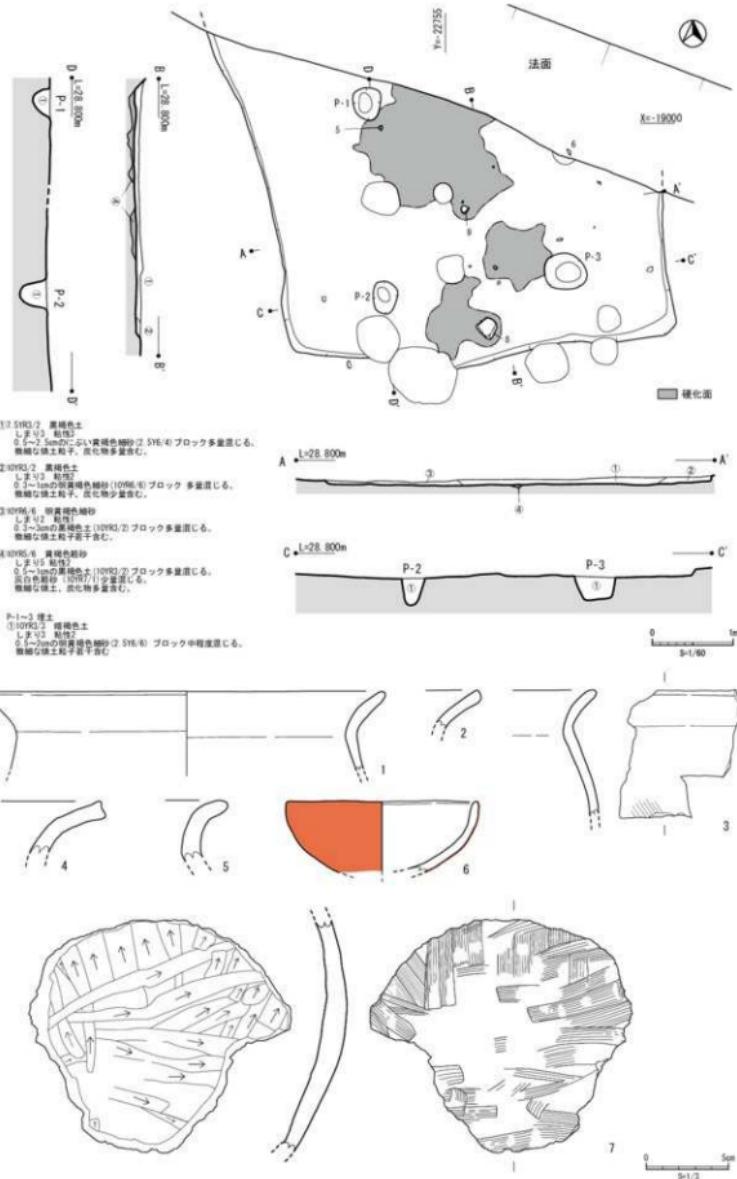
I層	耕作土	土層注記例
II層	黒褐色土(細分層可能)	しまり 強い 5 しまりが強く、移植ゴテで掘削するのに強い力が必要。 削ったときに光沢を帯びることもある。 4 ややしまりが強い。粘質土や過構成土の一層。 3 しまり中程度。湿った状態で、やや粘性のある黒褐色土が基準。 2 ややしまりが弱い。砂質の強い土が多い。 弱い 1 しまりが弱く、移植ゴテで軽い力で掘削できる。
III層	明黄褐色細砂(本遺跡検出層)	
IV層	黒褐色土	粘性 強い 5 粘土。適度に湿った状態では土が移植ゴテにまとわり付きやすい。 4 やや粘性が強い土。または粘土ブロックの混じる土。 3 いわゆる高ボク土で、湿った状態でやや粘性のあるもの。 2 やや砂質の強い土。 弱い 1 砂質で、掘削した際に土離れが良い。
V層	明黄褐色細砂	

第3図 基本土層図及び土層注記例

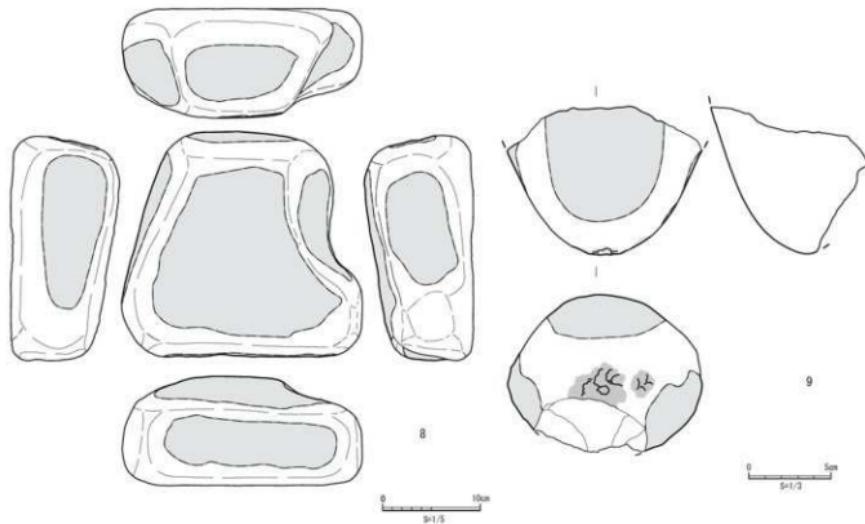




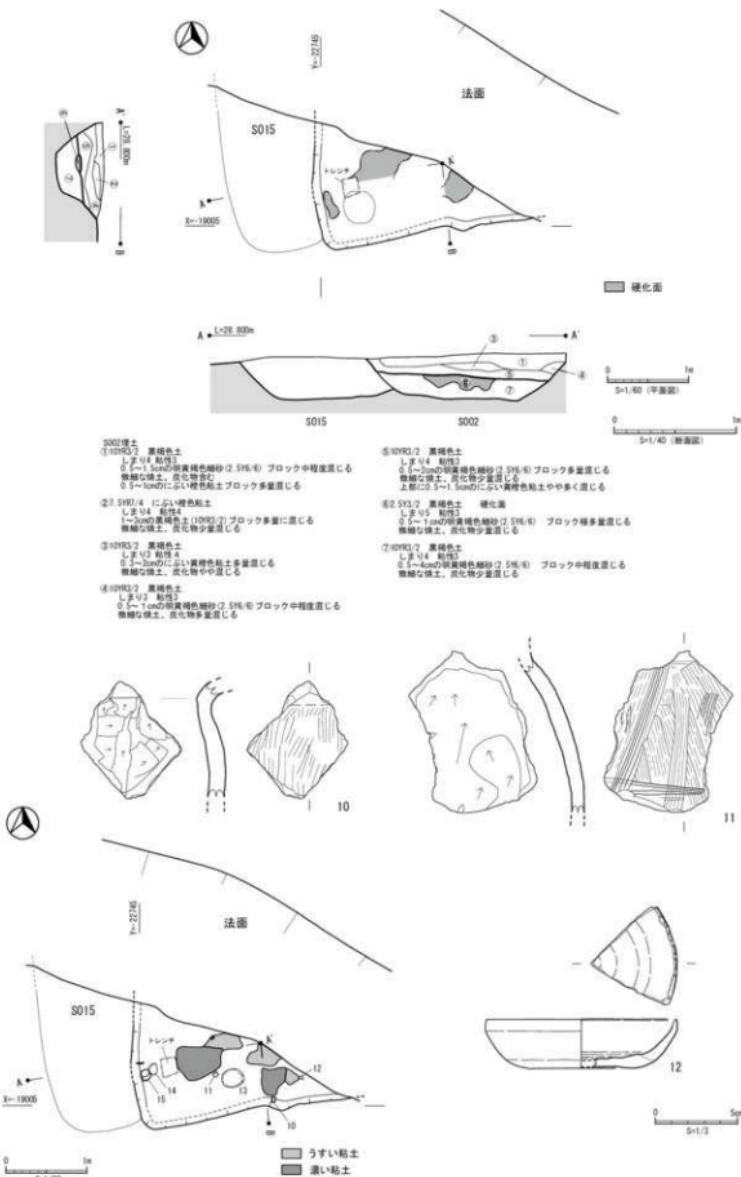
第5図 遺構配置図



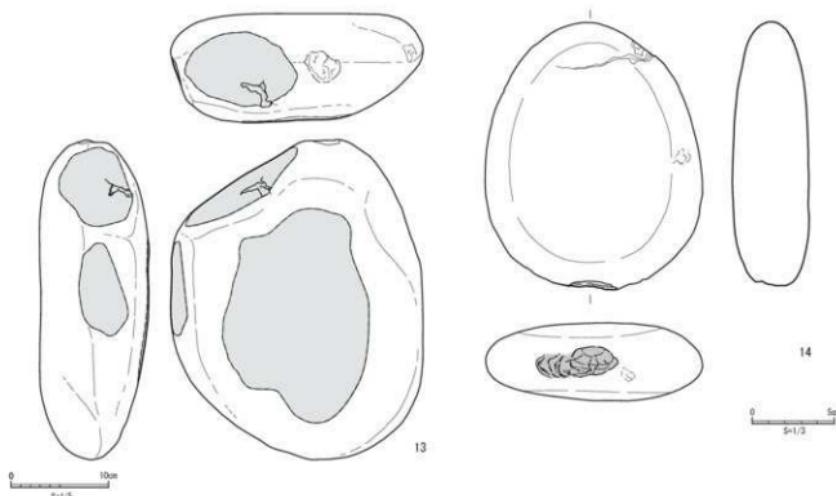
第6図 S001硬化面検出状況・遺物出土状況及び出土遺物実測図



第7図 S001完掘面実測図及び出土遺物実測図

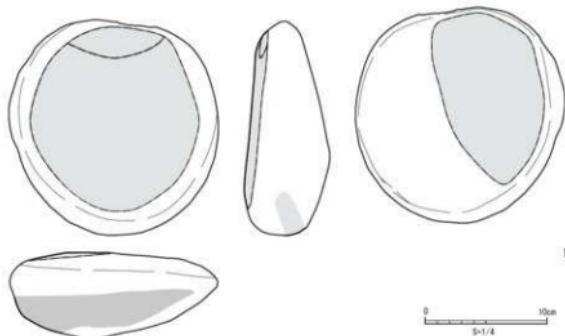


第8図 S002実測図・遺物・粘土出土状況及び出土遺物実測図



13

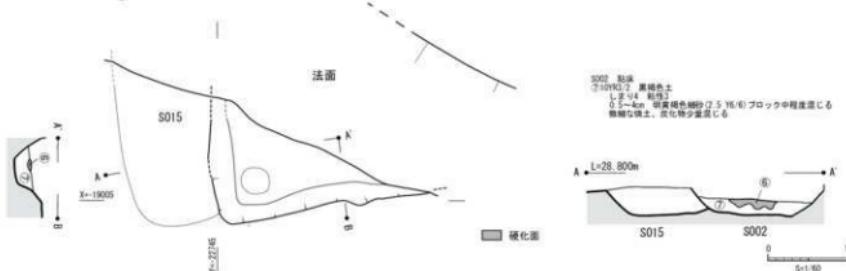
14

0  
5-1/2cm

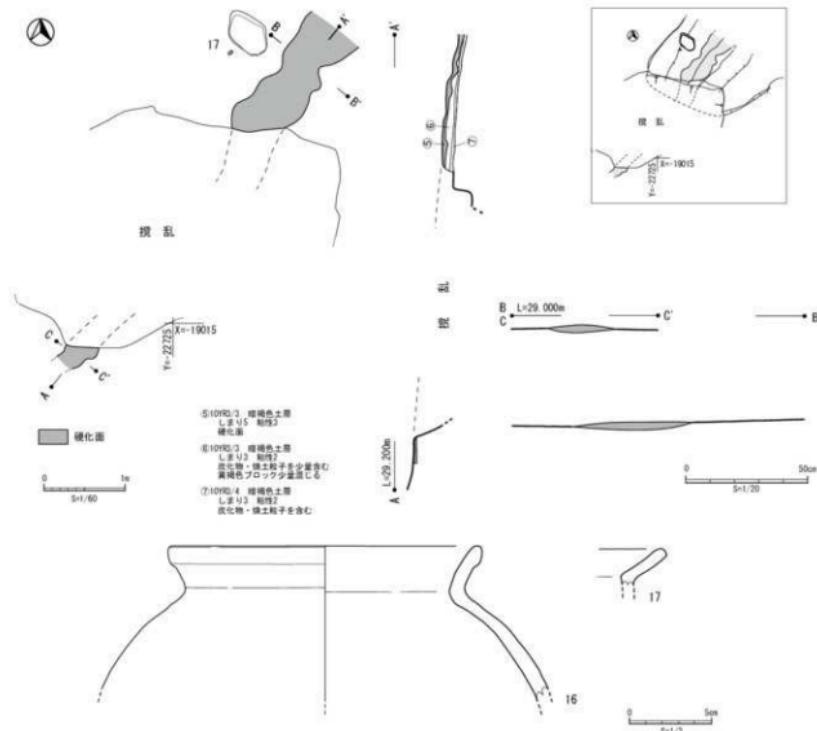
15

0  
5-1/4  
10cm

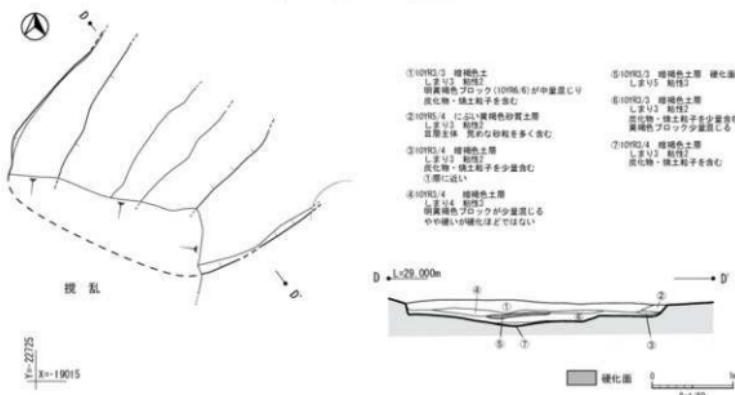
Ⓐ



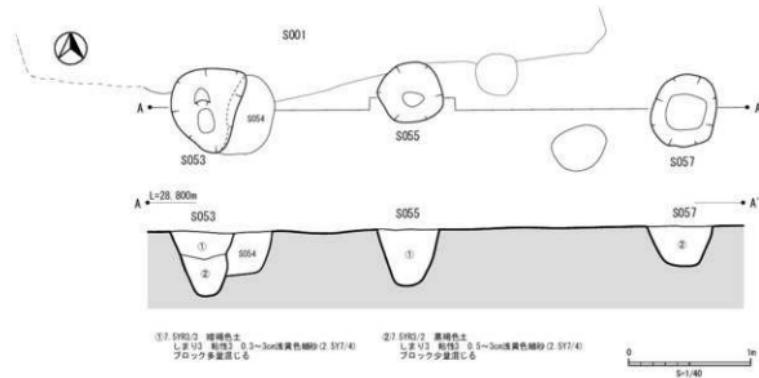
第9図 S002完掘状況及び出土遺物実測図



第 10 図 S003-1 実測図



第 11 図 S003-2 実測図



第 12 図 S004 実測図

#### S004 (S053・055・057 第 12 図)

9975・0075 グリッドにて検出された。S001 と切り合い関係にありこの遺構が新しい。ピット状の掘り込みが東西軸に並ぶ。芯々法で測ると S053 - S055 は 1.6 m、S055 - S057 は 2.2 m と多少の差異が生じるが、これらを柱穴と仮定したならば、その下位のレベルは均一に近く、また S054 は柱を設定する際に見られる掘り直しの痕跡とも想定される。しかしながら柱列として 3 遺構のみで、検出箇所が非常に狭小のため、これに連続する遺構が確認できなかった。したがって柱列の性格判断は困難であるが、本遺跡からの類似例がないため今後の検討として提示する。

#### S005 (S013 第 13 図)

調査区西側にあたる 0368 グリッドにおいて検出した北東から南西方向に延びる溝である。他の遺構との重複はなく、南北方向約 2.3m・幅約 0.4m、検出面からの深さは最深部で約 35 cm である。南北ともに端部は調査区内で立ち上がる。埋土は 3 層に分層される。水成堆積とみられる細砂が主体で、埋土①層はオーリーブ黒色、埋土②層は黒褐色、埋土③層は暗灰黄色を呈する。

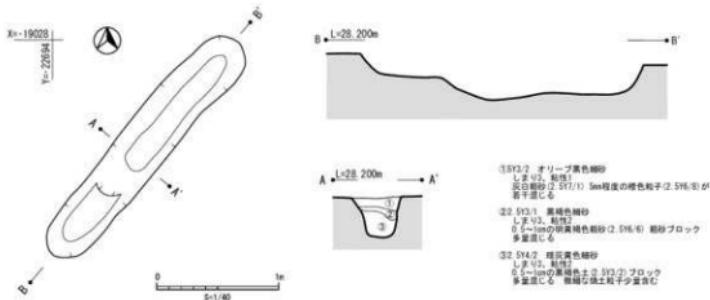
遺物は土器の小破片が少量出土したが実測に耐えられずまた時期は不明であるが、埋土の砂質の強い特徴から中世遺構と考えられる。

#### S006 (S075 第 14 図)

調査区西側にあたる 0074 グリッドにおいて検出した粘土集中部で他の遺構との重複はない。東西方向約 1.3m、南北方向約 0.9m を検出した。検出面より上位の包含層中において灰黄色粘土の集中を確認した。粘土の厚さは最大 7 cm 程度であり、明確な掘り込みは確認されなかった。遺物は土器の小破片が少量出土した。

#### S007 (S136 第 14 図)

調査区西側にあたる 0072・0172 グリッドにおいて検出した粘土集中部でこれも他の遺構との重複はない。東西方向約 0.8m、南北方向約 1.2m を検出した。検出面より上位の包含層中において濃い黄褐色粘土の集中を確認した。粘土の厚さは最大 10 cm 程度であり、S006 よりもやや小型であるが、これも明確な掘り込みは確認されなかった。遺物の出土は見られずその性格は不明であるが、S006 と同様に粘土集中が見られることから肅痕跡の可能性を示唆する。



第 13 図 S005 実測図

#### S008 (S010 第 15 図)

調査区東側にあたる 0467 グリッドにおいて検出した古代の土坑で、他の遺構との重複はない。東西方約 1.4m、南北方向約 0.4m を検出し北側は調査区外に広がる。検出面からの深さは最深部で約 20 cm である。平面形は楕円形を呈する。遺物は土器の小破片が少量出土した。埋土は 2 層に分層される。いずれも黒褐色土が主体で、埋土①層はにぶい黄色細砂ブロックが多量混じる。埋②層は混入物が少ない。

#### S009 (S012 第 15 図)

調査区西側にあたる 0368 グリッドにおいて検出した土坑で、他の遺構との重複はない。東西方向約 0.8m、南北方向約 1.2m、検出面からの深さは最深部で約 50 cm である。平面形は楕円形で、北側は狭いテラスが付く。遺物は土器の小破片が少量出土し、また白磁が含まれることから中世の時期と想定される。

埋土は 3 層に分層される。いずれも黒褐色土が主体で、埋土①層と③層には混入物は少ない。埋土②層は明黄褐色細砂ブロックが多量に混じる。

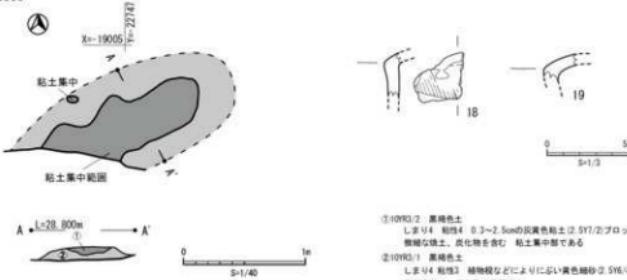
#### S010 (S074 第 15 図)

調査区西側にあたる 0075 グリッドにおいて検出した古代の土坑である。東西方向約 1.0m、南北方向約 1.5m、検出面からの深さは最深部で 60 cm 弱である。平面形は楕円形で、北側は狭いテラスが付く。遺物は土器の小破片が少量出土した。埋土は 3 層に分層される。埋土①層は暗褐色土が主体で、埋土②層と③層は黒褐色土主体である。

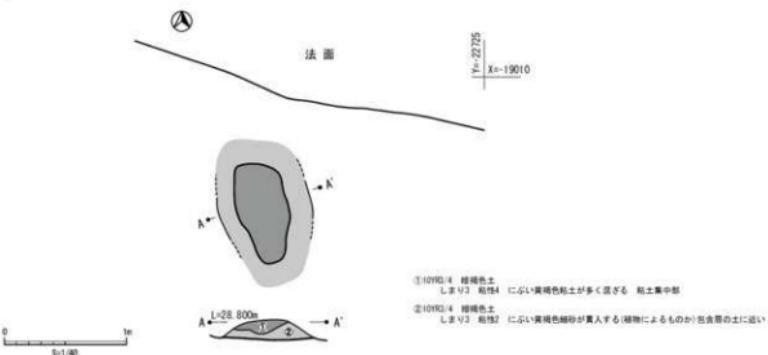
#### S012・013・014 (S072・126・127 第 16 図)

調査区東側にあたる 0074 グリッドにおいて検出した土坑群で新旧関係は古い順に S014・S013・S012 であろう。S014 のみ分層でき埋土①層は暗褐色土で焼土・炭化物が混じる。埋土②層は黒褐色土主体である。また東西方向約 0.9m、南北方向約 0.9m を検出した。西側は S013 により失われる。検出面からの深さは最深部で約 20 cm である。平面形は楕円形と考えられる。遺物は土器の小破片が少量出土した。S012 は東西方向約 0.8m、南北方向約 1m の楕円形である。埋土は単一層で掘り込みは V 字状を呈するが遺物も認められずその性格は不明である。またこの遺構に切り込まれているのが S013 で形態は楕円形を呈していると思われ、その掘り込みは U 字状を成す。これも遺物は出土せずその性格は不明であるが、掘り込み形態からは S014、S013・S012 と大別出来そうである。

S006



S007



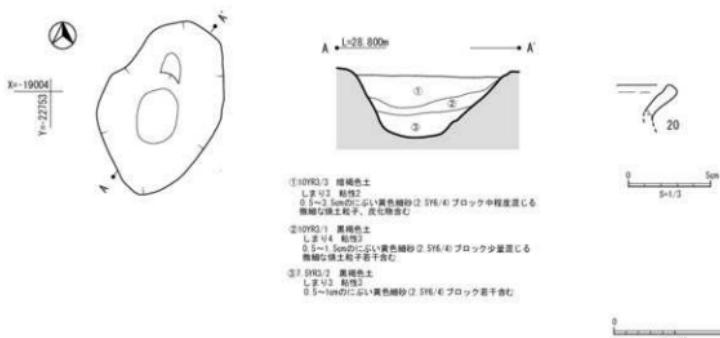
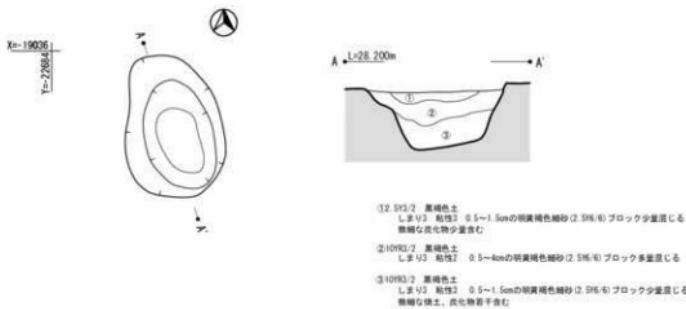
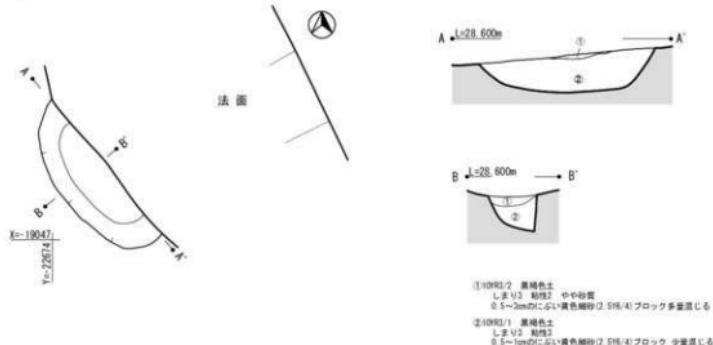
第 14 図 S006・007実測図及び出土遺物実測図

## S015 (S129 第16図)

調査区西側にあたる 0074 グリッドにおいて検出した古代の土坑である。S002 と重複し S002 より古い。東西方向約 1.3m、南北方向約 2.1m を検出した。東側は S002 により失われ、北側は調査区外に広がる。検出面からの深さは最深部で 35 cm 強である。埋土は 2 層に分層される。埋土①層は黒褐色土主体で焼土・炭化物がやや多く混じる。埋土②層は暗褐色土主体でややしまる。平面形は梢円形と考えられ、底面はおおむね平坦である。当初、S002 と同一遺構と考えたが、トレーナー掘削と No.6 基準杭の除去により別遺構であることを確認した。遺物は土器の小破片が出土し、あまり特徴は明確でないが、S002 より古いことから時期は 8 世紀後半以前と考えられる。

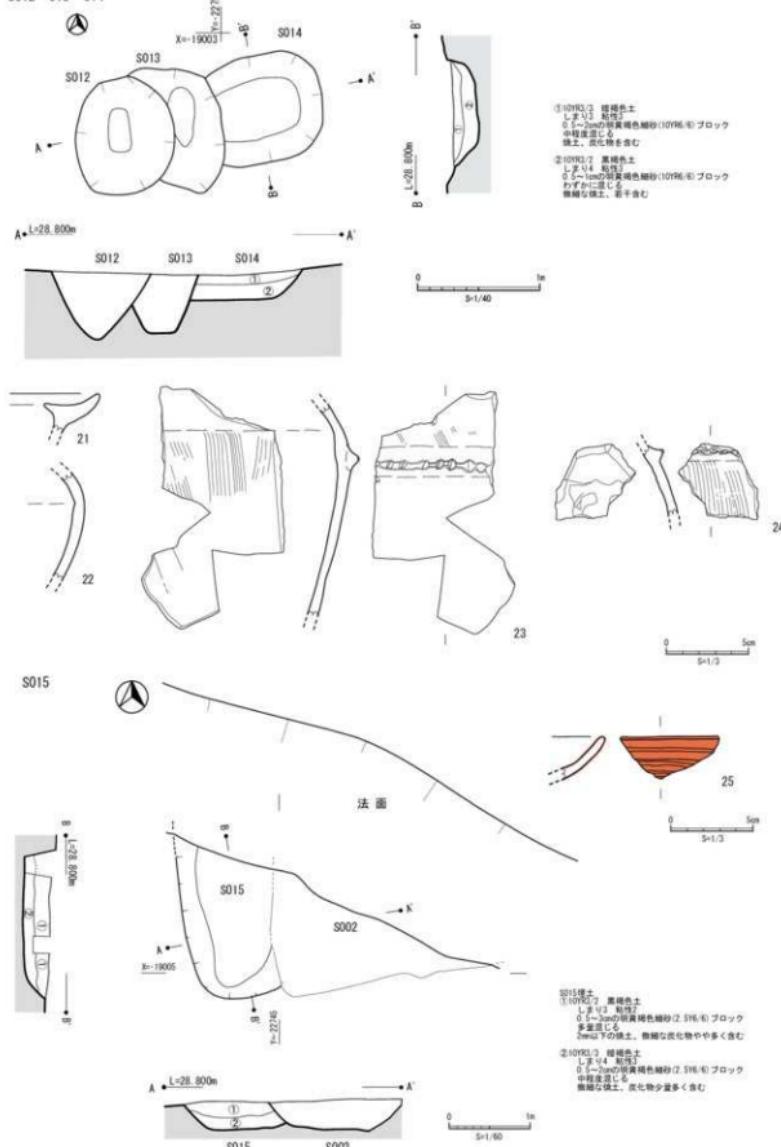
## S016 (S038 第17・18図)

調査区東端にあたる 0566・0567 グリッドにおいて検出した。S035・S036・S037 と重複しており、これらより古い。東西方向約 1.35m、南北方向約 2.8m を検出したが検出地点は南東部の先端で、ここは先細りした狭小地である。東側は S036・S037 により失われ北側及び南側は調査区外に広がる。検出面からの深さは最深部で約 10 cm、埋土は 3 層に分層される。埋土①層は黒褐色土主体で明黄褐色細砂プロックがやや多く混じる。埋土②層は黒褐色土主体で粘性が弱い。埋土③層は黒褐色土主体で明黄褐色細砂プロックが多量混じる。

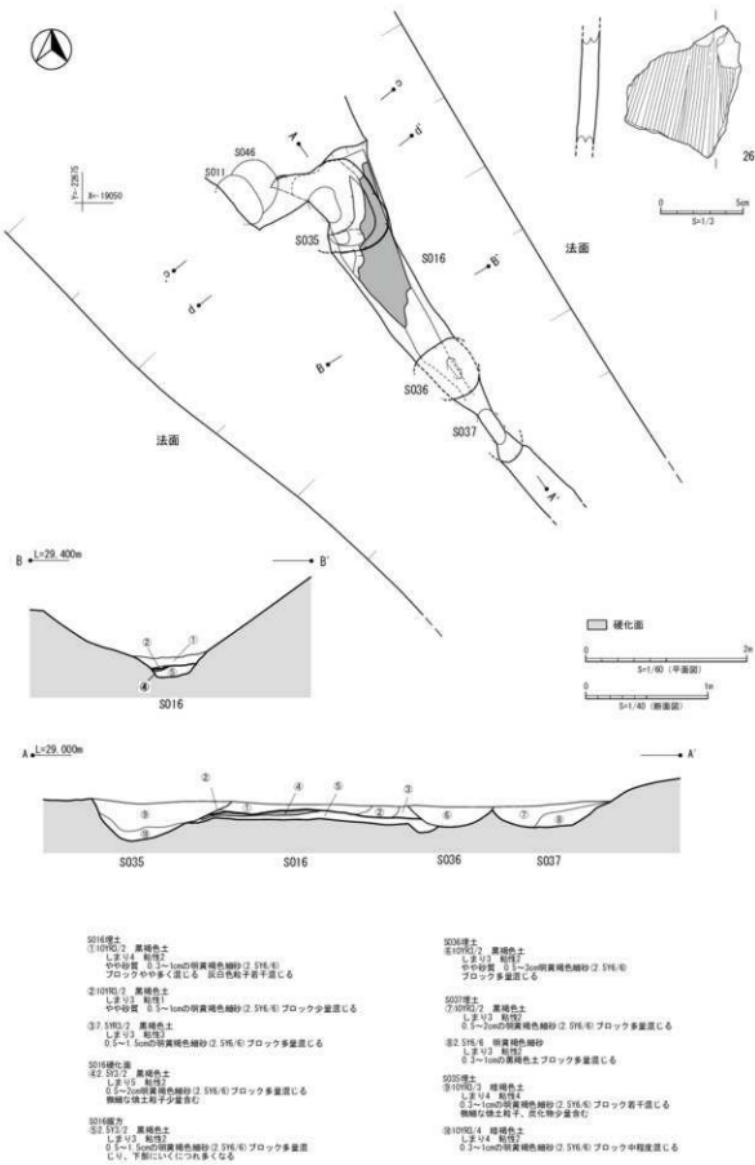


第 15 図 S008・009・010実測図及び出土遺物実測図

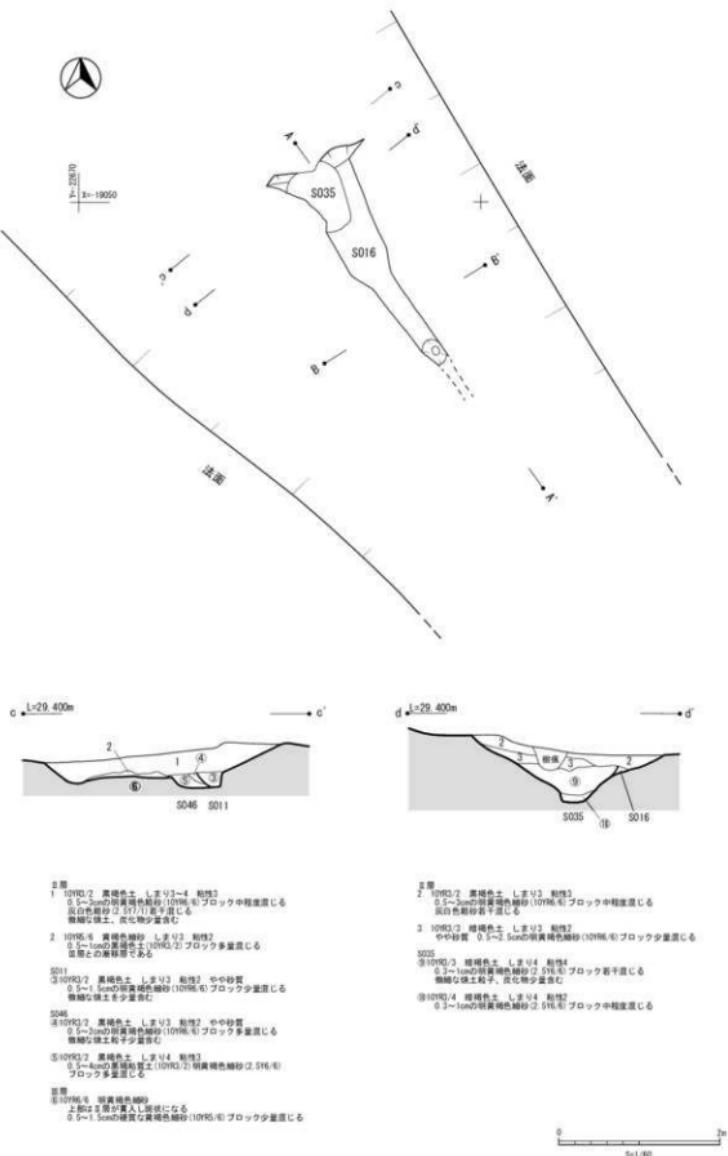
S012・013・014



第 16 図 S012・013・014・015実測図及び出土遺物実測図



第 17 図 S016 実測図



第 18 図 S016完掘状況及び東側土層断面



第 19 図 近現代歴断面図

当初、西壁が東側土層ベルトに隠れていたこともあり、S035・S036・S037 と同一遺構と考えて掘削したが、硬化面が検出されこれにより別遺構であることを確認した。遺物は弥生土器が少量出土した。検出に先立ち、包含層掘削時にこの地点から弥生土器が多量に出土した。本来この遺構に伴っていた可能性が考えられるが、検出した範囲が狭く、他遺構と重複するため床面の確認は一部にとどまる。中央から西側にかけて硬化面が広がり、周縁部よりやや盛り上がる。調査区の南壁及び S035 に接する地点で掘り込みを確認した。深さは 15 cm と浅く、不定形であるため主柱穴とは考えにくい。床面から明確な柱穴は検出されなかつた。

貼床は西側壁面付近が浅く、中央部が深い。最深部の深さは 20 cm 強である。貼床埋土は 2 層に分層される。硬化面は黒褐色土が主体で明黄褐色細砂ブロックが多量に混じる。貼床も色調は硬化面と同等であるがしまりは強くない。掘り方底面より東側においてピットを 1 基検出した。埋土は貼床と同質であることから主柱穴の可能性が考えられる。これらの遺物の特徴と硬化面・ピットの検出から弥生時代後期前半の堅穴建物であると推定されるが、これを断定することが困難であった。

### 近現代歴（第 19 図）

調査区西側にあたる 0368 グリッドにおいて調査開始時に検出した。幅 1.1 ~ 1.2 m の規則性があり、埋土の状況から近現代の烟痕跡と思われる。本遺跡の中核ではないが周囲の環境把握のため記録のみに留めた。

### 遺物（第 20 ~ 25 図）

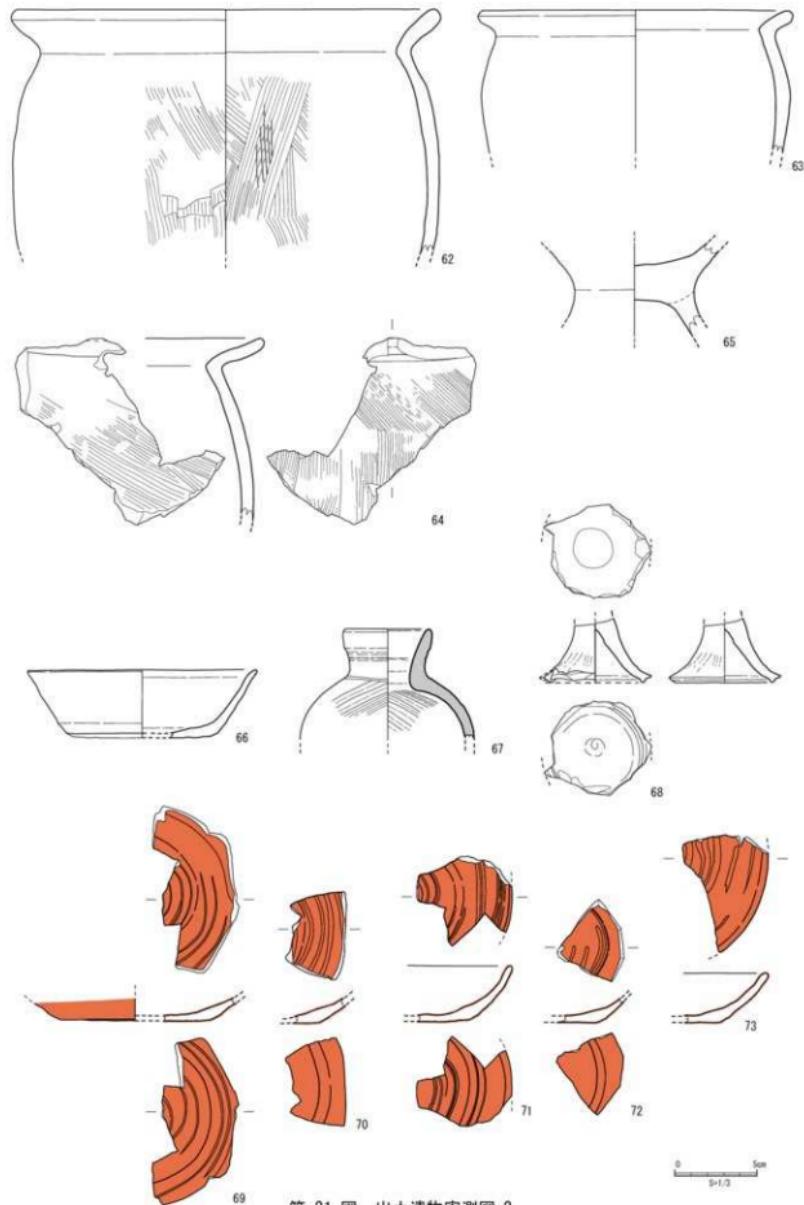
No. 29 ~ 41 までは弥生土器の口縁部である。No. 29 は城ノ越式、No. 30 は須玖式 II で、他の緩やかな U 字状口縁を持つものは黒髮式である。何れも弥生中期に位置付けされている。No. 42 からは口縁から胴部資料であり一部、彩色が確認される No. 48 などは口縁部に放射状に肉眼観察ではベンガラ（酸化第二鉄）が施されている。他には暗文の No. 50・51 など特異な類例が見られる。No. 27・28・61 は刻み目突帯を持つ土器群である。この種は本遺跡では少ないが、No. 28 のように刻み目突帯に彩色が施される特異な事例も見られる。No. 60 は貼り付けが一部残存し、肩部に張り巡らす S 字やノ字状施文であろう。No. 52 は脚部であるがその端部には連続剥離が見られ意図的な作為が感じられる。儀礼か遊具としての転用であろう。

No. 66 は本遺跡のもう一つのピークである古代期、8 世紀後半の土器器群である。また破片であるがこの時期の回転ヘラミガキの彩色土器、No. 69 ~ 73 で一部略文も確認される。これらの彩色土器は儀礼と考えた場合、この時期には目的により使用・用途は不明であるが、日常生活にハレ・ケなどの区域が存在したことが窺える。

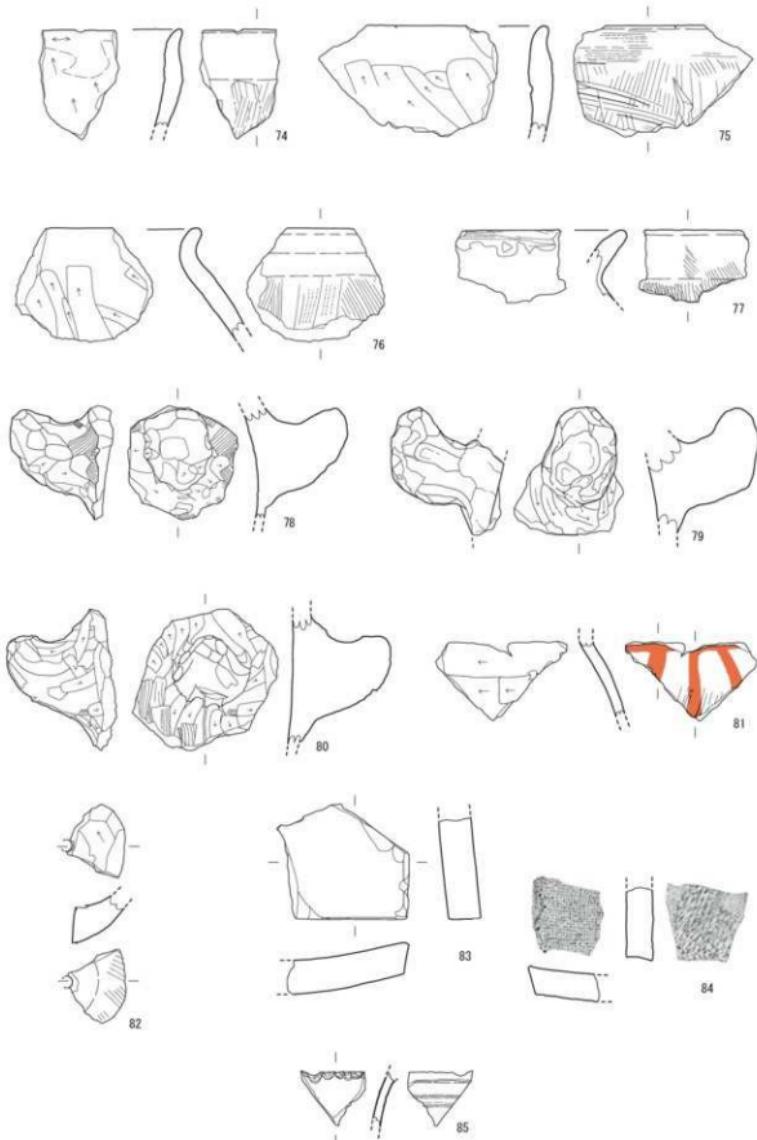
No. 82 は碗状の破片で底部に孔が穿ってあるが、その用途は不明の土器である。No. 83・84 は平瓦破片で No. 84 には布目と叩きが確認される。点数としては 2 点のみであり、また摩耗していることから本遺跡に流れ込んだ遺物であろうが、このことは近在に瓦葺きの建物の存在を示唆するものである。No. 85 は輸入磁器の瓶の口縁部である。上位に連続剥離の打ち欠きが確認される。



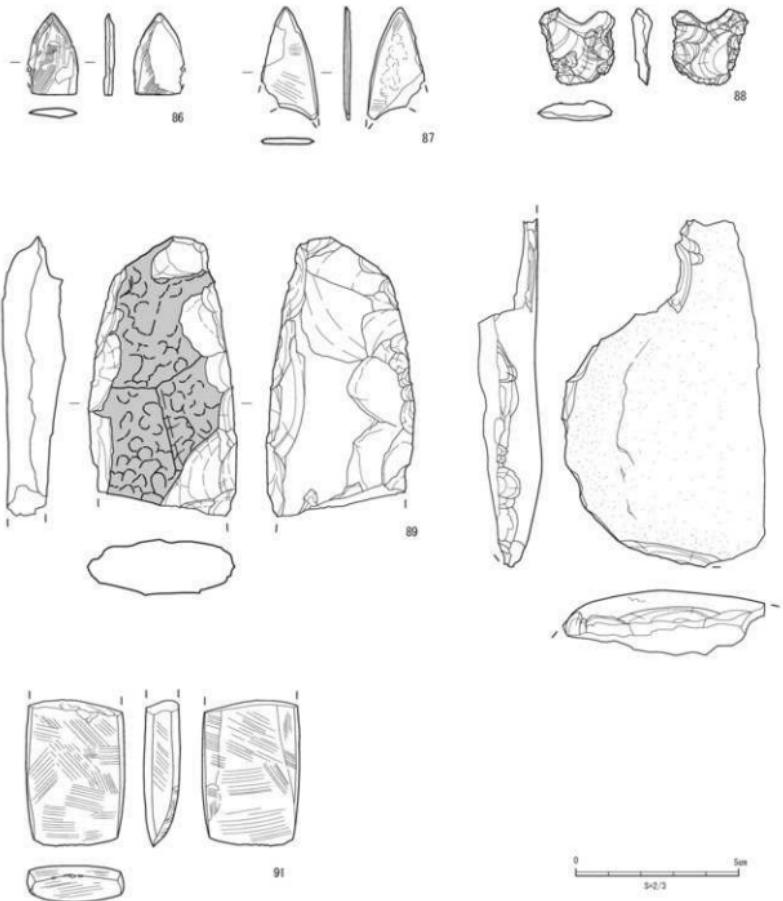
第 20 図 出土遺物実測図 1



第 21 図 出土遺物実測図 2

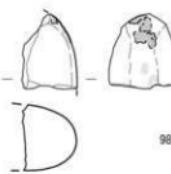
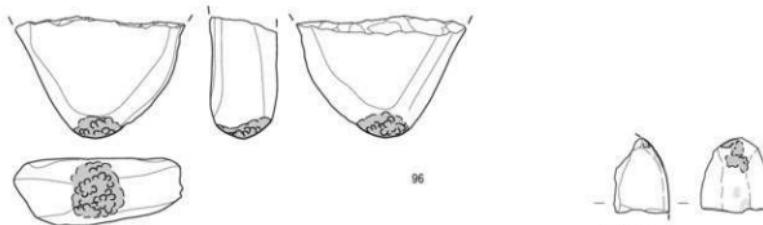
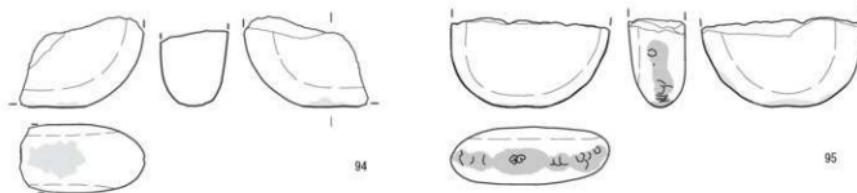
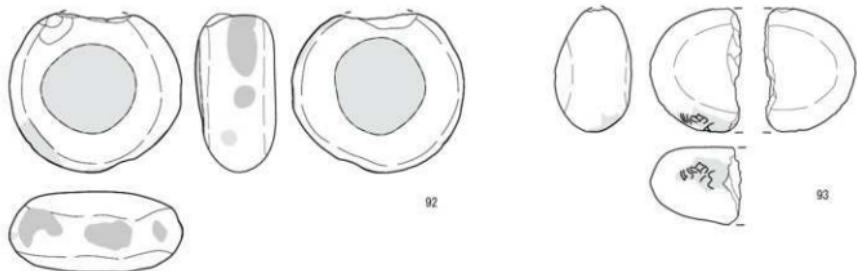


第 22 図 出土遺物実測図 3



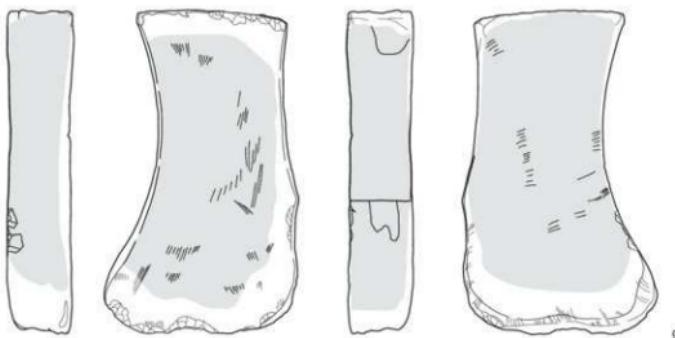
第 23 図 出土遺物実測図 4

石器の No. 86・87 は磨製石鎌で、No. 86 は粘板岩、No. 87 は頁岩であり磨製石鎌によく用いられる石材である。いざれも弥生時代の遺物と思われる。No. 88 は黒曜石製の石鎌型であり、通常の石鎌の先端部が明確でなくその判断に迷ったが、先端は二つに分かれる脇抜をなす「雁股」状に配置した。二次加工のある剥片もしくは不明石器とした。No. 89・90・91 は石斧類で No. 89 は打製石斧の刃部が欠損している。また No. 90 は撥状石斧で使用時の衝撃によるものか半裁された状態である。No. 91 は小型磨製石斧でその形状から鑿型と想定できる。加工用具か。No. 92～No. 98 は擦石・敲き石類で使用後に廃棄されたものであろう。材質は安山岩で近接する白川等の護岸より供給したものであろう。No. 99 は砥石で上面・背面・側



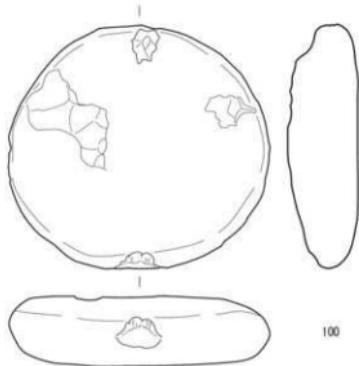
0 5mm  
5x1/3

第 24 図 出土遺物実測図 5

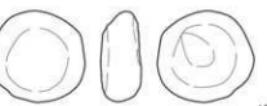


99

0 5cm  
5×1/3



100



101

0 5cm  
5×2/3

第 25 図 出土遺物実測図 6

面の4ヶ所に使用痕が確認でき、目的によりその面を使用したのであろう。砂岩製である。No. 100 は扁平状の円形石に僅かであるが2ヶ所の打ち欠きが確認されることから石硃として掲載した。この石硃の用途であるが近在する白川等の川漁の沈子として想定できるが、単独出土のため不明確である。類例から編み具の硃としても使用が指摘されている。No. 101 は小型扁平石で整形した痕跡が見られることから何らかの用具であろうが、実用品としてはあまりにも小型であるため遊具等の一種と想定したが時期等は不明である。

## 第4章 総括

### 第1節 遺構

検出遺構は住居3基・土坑7基・柱列1基・不明遺構1基である。弥生はS016であり、他は古代の遺構が主であるが出土遺物は何れも破片であった。時期不明はS015・008・009などの土坑である。調査区は狭小でありこれに傾斜が伴ったため、そのほとんどの遺構は調査区外にその範囲を広げていた。古代住居は正・長方形のプランであろうが前述したようにその全体の検出はできず、したがって本遺跡での規格性を見出すことが出来ない。S001が東西軸4.8mを測るためこの軸の長さは一つの目安としたい。他の居住地についてはその情報に乏しくS001を参考にせざるを得ないがその規格は、その出土遺物から大きな変化は少ないよう感じる。何れも古代の居住地であるが癪の検出に伴う完掘は困難であった。またS006・007などは粘土集中部であるが焼土・カーボンの出土により火を用いたことは明白であるが、野外炉ではなくやはり住居に伴う遺構であろうが、本遺跡での住居検出の条件は厳しく、床直での確認も多かつたことからこれらの粘土集中部という遺構も居住地の痕跡と考える。

他の顕著な遺構として土坑があるが、土坑とは人為的な掘り込みであり、その目的により埋葬・貯蔵・粘土採掘・燃焼・廃棄などが挙げられるが、本遺跡での土坑は切り合いも多く、またその性格を示す遺物の出土も見られなかった。S012・009などは壌立建物のピットに類似しているため、これに該当するかもしれないが狭小な調査区ではこれらの遺構の連続性は見出せなかった。溝状遺構は単独であり深さもあるが、形状から土坑とも言えなくはないが、ここでは溝状を呈しているためこのような表記を行い掲載した。また生活を窺い知る遺構として道路状遺構(S003)には硬化面が幅30cm程度で検出され、白川河川に緩やかに傾斜が確認された。硬化面はやや薄いがこれは使用頻度・時間・土壤の性質によるものと思われる。

### 第2節 遺物

#### (1) 土器

本遺跡では出土土器から弥生期と古代があり、また検出された遺構もそれを示している。弥生期は中期後半頃で中部九州系の黒髮式(No.31～41)と北部九州系の城ノ越式(No.29)・須玖式土器(No.30)が確認されている。須玖式は1点のみであるが、須玖式IIに該当しこれにより弥生期中期後半の本遺跡存在を示す資料となる。彩色については肉眼観察ではベンガラ(酸化第二鉄)が確認され、一部に赤色系の土をこれに応用(No.61)したものもある。通常、その用途は祭祀土器と考えられるため儀礼等に用いたのであろう。

この時期には日常生活における精神文化の充実を示唆するものである。本遺跡のもう一つのピーク古代でもこの彩色土器の出土が顕著であり、日常(ケ)と非日常(ハレ)が明確化していたことが窺える。

また本遺跡では1点(No.52)だけであるが意図的に打ち欠く、いわゆる連続剥離があり、中世輸入磁器にその傾向が見られる「瓦玉」と同質であろうか。この「瓦玉」は遊具と考えられている。この弥生期に遊具の存在についてはその想定が困難であるが、ここは提示資料として留めておきたい。また中世輸入磁器のNo.85は瓶の口縁部であるがこれにも連続剥離の打ち欠きが見られる。意図的な作為であるがその目的は不明である。

#### (2) 石器

石器は磨製石鎌(No.86・87)、石斧(No.89・90・91)、擦石・敲き石(No.92～98)、石礫、用途不明具として掲載した。石器から時期を設定することが本遺跡では困難であるが、縄文期の狩猟を中心とした石器群とはやや様相が異なる感を受ける。それでも石鎌や土掘具と仮定される打製石斧や擦石・敲き石など

からその生業が狩猟や採集を中心としていたとも想定できる。石礫を沈子としたならば漁撈活動も想定できる。これらは本遺跡の中心期の弥生中期として述べている。

また現在の感覚では、理解が困難である祭祀や遊具等の遺物も見られるが、掲載に留める範疇でしかなかった。本来は使用可能な道具は人の移動に伴うもので、遺跡に出土する遺物は祭祀等の特異な事例を除いて廃棄されたものである。その顕著な類例が石斧や擦石・敲き石である。何れも欠損しており完形ではない。尤も素材の供給が得られる地域であるならばその地での製作も可能である。人の動きに伴う道具を想定したが、素材・数量に乏しくこれは狭小な本遺跡での事例として提示しておきたい。また本遺跡で金属物や木器の出土はなかった。

### 第3節 結言

狭小な調査地であったがその検出遺構・出土遺物から大別すると弥生時代と古代にピークを持つ遺跡である。その時期は弥生時代中期前半に該当し、また弥生時代中期後半にまで連続しているような感をうけるが、この後期の出土遺物は1点のみのため、その中心は弥生時代中期前半でありこの中期後半には遺跡が縮小したか他地域への移動が行われたかとも考えられる。もう一つの時代は出土遺物から8世紀前半と想定され、この時期の住居が検出されたことは本遺跡の成果である。軸5m弱の完形プランの検出は前述したように狭小調査地のため困難であったが、複数の住居検出から小規模ながら集落であるムラの存在を暗示している。この時期に想定した道路状遺構(S003)は河川に水の供給等を目的と推定されるがその時期は明確でなく、石礫の出土から川漁を主とした漁撈活動の生業などの生活路としてその使用期間は長くない。このことは自然災害も影響しムラを捨てることもあったのであろう。しかし住居地・路というセット関係として重要であり、併せてこのような情景を想定し復元、提示することが本調査の目的の一つである。また本遺跡では磨製石器(№86・87)、石斧(№89・90・91)、擦石・敲き石(№92~98)などの出土から生業は狩猟・採集なども行われ、農耕については本遺跡では明確ではなかったが年間の生業カレンダーを作成する際の情報提示と成り得る。その意味で本報告書に掲載した近現代版(第19図)は農耕が連綿と行われてきたことを提示したものである。また彩色土器の顕著な出土によりその生活において日常・非日常の精神文化の存在も想定でき、これらの資料も生業・生活を含めた思考の素材となる。

本遺跡は白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査であり、熊本広域大水害という復興事業である。水は多大な恩恵と猛威という両面を持つことも今回の調査で判明し、調査員としてこのような視点で調査を遂行することができた。この河岸段丘定位面で蛇行地帯突出部の下南部遺跡は弥生時代中期と古代の遺跡であることが周知されており、北端の本遺跡はその位置と標高から下南部遺跡はこの突出部全体に広がることが推定される。下南部周辺の遺跡は白川という水資源に恵まれ、その恩恵を十分に受けた地域でこのような遺跡は白川沿いに多く存在する(第1図・第1・2表)中で、本遺跡は小規模であり、その発信内容も僅かであるが、白川流域の弥生時代と古代についてこの成果を次に繋げるための遺跡である。このような点を周囲に確認させ、白川流域の様相の解明の弾みとしたい。

第3表 出土遺物類聚表  
(土器)

探査番号	種類	実測	出土位置	層別	断面(φ)		断面	口径	底径	腹径	調査	内面	外面	色調	胎土	焼成	備考
					直徑	厚度											
1	57	0502	壤土	Ⅱ	1.0	0.05	四	(23.8)	4.5	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐灰土	良	
2	59	0502	壤土	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.4	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
3	56	0502	壤土	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	7.3	—	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
4	60	0502	壤土	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	4.7	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
5	54	0502	No.1	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	3.1	7.4	+	2.5195.42-51.9	2.5195.42-51.9	褐色	褐白土	良	
6	55	0502	No.3	Ⅱ	1.0	0.05	四	(11.6)	4.5	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	内面赤褐色(51.9)有施
7	58	0502	壤土	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	14.2	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
10	62	0503	No.1	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	7.1	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
8	11	0503	No.5	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	9.6	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
12	63	0503	No.7	Ⅱ	1.0	0.05	四	(11.7)	6.1	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	内面刮削痕有施
10	16	0510	壤土	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	9.5	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
17	74	0510	No.3	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.3	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
18	75	0515	壤土	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.8	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
14	19	72	0515	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	1.9	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
15	20	63	0514	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.2	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
21	76	0517	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.4	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
22	78	0517	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	6.7	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
16	29	79	0517	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	13.1	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
24	77	0526	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	4.5	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
26	60	5179	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.1	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
17	26	71	5205	壤土	Ⅱ	1.0	0.05	四	7.0	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良	
27	4	0172	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	6.8	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
28	7	0170	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.7	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
29	19	0172	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	3.3	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
30	10	0173	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	4.2	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
31	18	0270	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	3.1	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
32	8	0170	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.2	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		
33	81	0270	Ⅱ	1.0	0.05	四	—	2.1	7.4	+	2.5197.42-51.9	2.5197.42-51.9	褐色	褐白土	良		

层号	层位	地层名称	时代	厚度(m)		岩性	特征	厚度	岩性	特征	厚度	岩性	特征	层号
				厚度	岩性									
34	16	0074	Ⅲ	0.07	风化土层	风化土层	风化土层	0.7	风化土层	风化土层	0.7	风化土层	风化土层	35
35	21	0075	Ⅱ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.7	风生土层	风生土层	2.7	风生土层	风生土层	36
36	13	0270	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.1	风生土层	风生土层	2.1	风生土层	风生土层	37
37	12	0074	Ⅲ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.4	风生土层	风生土层	2.4	风生土层	风生土层	38
38	17	0162	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.7	风生土层	风生土层	2.7	风生土层	风生土层	39
39	14	0080	Ⅱ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	3.0	风生土层	风生土层	3.0	风生土层	风生土层	40
40	11	CSE		0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.5	风生土层	风生土层	2.5	风生土层	风生土层	41
41	9	0075	Ⅲ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.2	风生土层	风生土层	2.2	风生土层	风生土层	42
42	6	0172	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	5.0	风生土层	风生土层	5.0	风生土层	风生土层	43
43	6	CSE		0.07	风生土层	风生土层	风生土层	1.3	风生土层	风生土层	1.3	风生土层	风生土层	44
44	20	0170	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.0	风生土层	风生土层	2.0	风生土层	风生土层	45
45	80	0017		0.07	风生土层	风生土层	风生土层	6.1	风生土层	风生土层	6.1	风生土层	风生土层	46
46	22	0162	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	3.0	风生土层	风生土层	3.0	风生土层	风生土层	47
47	20	0172	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	1.6	风生土层	风生土层	1.6	风生土层	风生土层	48
48	69	0129		0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.1	风生土层	风生土层	2.1	风生土层	风生土层	49
49	1	0074	Ⅲ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.7	风生土层	风生土层	2.7	风生土层	风生土层	50
50	25	0074	Ⅲ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	10.0	风生土层	风生土层	10.0	风生土层	风生土层	51
51	67	0083		0.07	风生土层	风生土层	风生土层	3.7	风生土层	风生土层	3.7	风生土层	风生土层	52
52	30	0170	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	5.1	风生土层	风生土层	5.1	风生土层	风生土层	53
53	31	中灰-灰色	漂砾	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	0.6	风生土层	风生土层	0.6	风生土层	风生土层	54
54	15	0172	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.6	风生土层	风生土层	2.6	风生土层	风生土层	55
55	2	0075	Ⅲ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	3.8	风生土层	风生土层	3.8	风生土层	风生土层	56
56	3	0173	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	2.3	风生土层	风生土层	2.3	风生土层	风生土层	57
57	27	0074	Ⅲ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	5.5	风生土层	风生土层	5.5	风生土层	风生土层	58
58	35	0270	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	0.6	风生土层	风生土层	0.6	风生土层	风生土层	59
59	15	0172	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	1.6	风生土层	风生土层	1.6	风生土层	风生土层	60
60	26	0080		0.07	风生土层	风生土层	风生土层	6.1	风生土层	风生土层	6.1	风生土层	风生土层	61
61	66	0083		0.07	风生土层	风生土层	风生土层	8.6	风生土层	风生土层	8.6	风生土层	风生土层	62
62	34	0074	Ⅲ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	25.6	风生土层	风生土层	25.6	风生土层	风生土层	63
63	38	0171	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	8.8	风生土层	风生土层	8.8	风生土层	风生土层	64
64	33	0162	Ⅰ	0.07	风生土层	风生土层	风生土层	11.1	风生土层	风生土层	11.1	风生土层	风生土层	

探査番号	総高	実測高	出土品名		寸法 mm	形状	底面 寸法 mm	断面 寸法 mm	材質	調査	内面	外面	色調	地土	地質	備考
			幅	厚												
65	32	00714	瓦		約140	筒	約140	5.5	陶テラコッタ	ナゲ	2076.8-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	青白石・黄褐色	角石	角石	
66	46	0172	瓦		土器	瓦	63×152	6.5×	瓦	ナゲ	2076.8-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	青白石・黄褐色	角石	角石	
67	52	0172	瓦	上部上	瓦	瓦	63×152	6.5×	瓦	ナゲ	2076.8-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	青白石・黄褐色	角石	角石	細胞状の土柱
68	29	CSE			土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	
71	69	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
70	47	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
71	48	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
72	49	00715	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
73	45	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
74	23	00715	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
75	36	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
76	37	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
77	40	48Z	瓦		筒生土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
78	41	00715	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
79	42	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
80	43	008	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
81	24	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
82	26	00714	瓦		土器	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩
85	53	00712	瓦		筒瓦	瓦	ナゲ	ナゲ	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩	三五石・白色砂岩

(五)

探査番号	総高	実測高	出土品名		寸法 mm	形状	底面 寸法 mm	断面 寸法 mm	材質	調査	内面	外面	色調	地土	地質	備考
			幅	厚												
83	50	CSE	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	筒瓦	2076.7-21.5cm 黄褐色	5.5×	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	青白石・黃褐色	角石	角石	
84	51	00715	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	筒瓦	2076.7-21.5cm 黄褐色	5.5×	瓦	ナゲ	2076.7-21.5cm 黄褐色	2076.7-21.5cm 黄褐色	青白石・黃褐色	角石	角石	

## (石器)

※(参考)器物の種類ごとに番号で表示

## 遺構一覧表

件名 番号	器種 番号	実測 寸法	出土地点 No.	分類	出土状況 No.	基盤 No.	石片 No.	法 量			新選擇番号※	旧選擇番号
								長(cm)	幅(cm)	厚(cm)		
7	石2	S082			No.14	合石	無石安山岩	23.0	24.75	11.15	S001	S082
9	石20	S082			No.6	磨石/敲石	瓦山岩	(9.1)	(12.0)	(9.6)	S002	S083
13	石1	S083			No.5	合石	斜坡	32.7	25.7	11.2	S003-1	S100
9	石4	S083			No.3	磨石	瓦山岩	16.5	13.4	4.75	S003-2	S100
15	石5	S083			No.4	磨石/敲石	無石安山岩	17.6	17.1	6.1	S004	柱列(S053-055-057)
86	石8	S085			III	磨石/敲石	斜坡	2.5	1.65	0.3	S005	S013
87	石9	S085			III	磨石/敲石	斜坡	(3.45)	(1.65)	0.2	S006	S075
23	石11	C08			23加工斜	無端石	23.5	2.3	0.6	2.3	S007	S136
69	石10	C08			打敲石多	瓦山岩	8.5	4.6	1.9	6.9	S008	S010
90	石14		不明	III	II打敲石	斜坡	(10.6)	(6.2)	(1.95)	116.4	S009	S012
91	石7	A.8	III		磨石/敲石	斜坡?	4.45	3.0	1.1	29.9	S010	S074
92	石21	0170	法面直壁		磨石/敲石	無石安山岩	9.6	10.6	4.95	84.2	S012	S072
93	石16	A.8	III		磨石	瓦山岩	7.5	(5.6)	4.7	235.9	S013	S126
94	石15	A.8	III		敲石	無石安山岩	(5.5)	(7.7)	4.2	219.1	S014	S127
24	石18	A.8	III		敲石	瓦山岩	(6.5)	9.8	3.5	281.6	S015	S129
96	石13	0075	III		敲石	瓦山岩	(7.4)	(10.4)	4.1	473.2	S016	S038
97	石12	S044			敲石	瓦山岩	(6.7)	(9.5)	2.8	238.8		
98	石17	A.8	III		磨石/敲石	瓦山岩	(4.6)	(3.4)	(4.05)	78.4		
99	石3	0170			敲石	斜坡	19.9	12.0	4.1	141.5		
25	石6	S08	III		石塊	瓦山岩	7.45	8.0	2.5	178.3		
(101)	石19	A.8	III		透鏡	瓦山岩	2.8	3.0	1.2	16.2		

※S011は旧番号とかさなるので  
欠番とした。







S002 完掘状况  
南→



S004 完掘状况  
西→



S053 · S054 土层断面  
南→



S003-1 + -2 硬化面探出・遺物出土状況  
南→



S005 完掘状況  
北→



S015 完掘状況  
南→



S010 完掘状况

西→



S016 完掘状况

北西→







22



23



24



25



26



27



28



29





38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



67



69



68



69



70



71



70



71



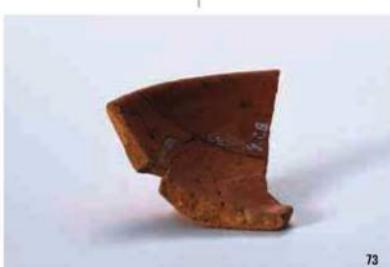
72



73



72



73



66



74



75



76



77



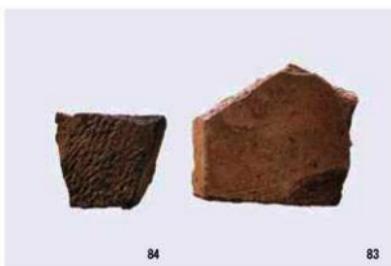
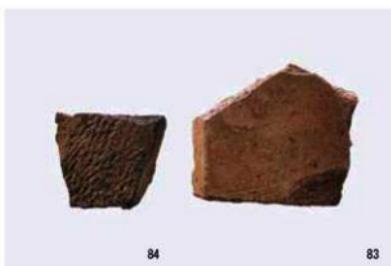
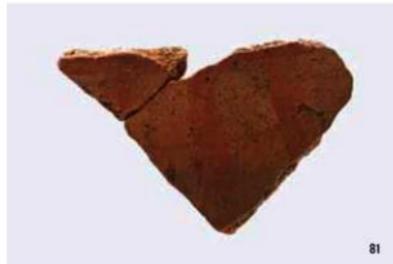
78



79



80





88



89



90



91



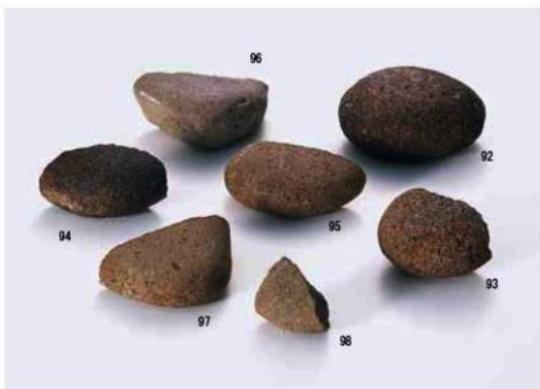
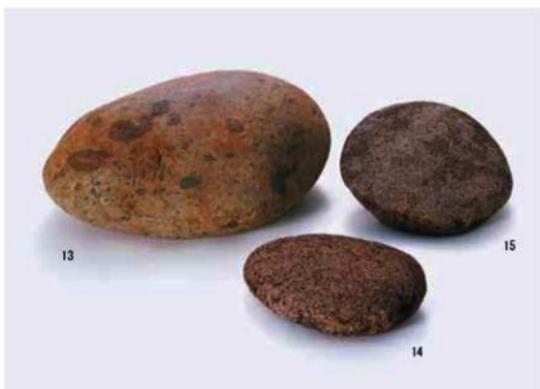
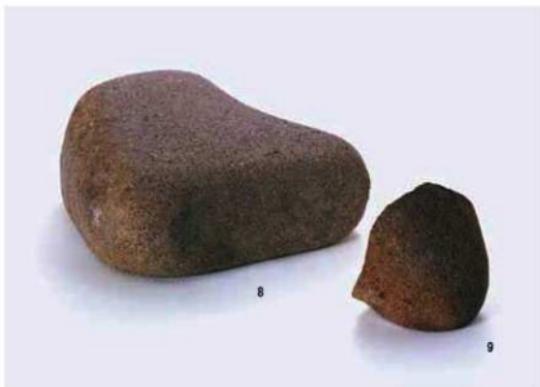
99



100



101





## 報告書抄録

熊本県文化財調査報告 第325集
下南部遺跡
-白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-
平成29年3月31日
編集 熊本県教育委員会 発行 〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
印刷 株式会社林田印刷 〒860-0029 熊本市中央区米屋町1-9

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第325集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：下南部遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2019年1月15日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>